

春



## 春

---

陽だまりの地面を見つめていた。乾いた草と混じりほのかに芽吹いている地面。  
春とはいえまだ光は浅く、むしろ冬を思わせるような景色だった。

今日は元気ないね

ふられたからね

え。だれに？

噴出するようにして彼は笑った。

彼はアイジンである。

彼は私のアイジンであり、私は彼のアイジンでもある。

好きになった人がいたんだけど、ふられた。

好きになった人は

動物のように、ひどくきれいな目をする人だった。

無垢で意図のない目。

ときどきすごく、さびしい目もした。

彼自身がさびしいのではなく、表情と意図が無さ過ぎて、

「さびしい」空気を漂わせる目だった。

気が利くし、意外とモテるのかなあ。いけると思ってたんだけどな。

ほんとにふられたんだ。

アイジン氏は事態を把握してくれ、ぽかんとしたような顔をしていた。

感受性の鋭い方ではないくせに、状況の飲み込みと、

私のココロの移り変わりを理解するのが異常に早かった。

だから彼は、ただのウワキ相手ではなく、長く私のアイジンだった。

好きになったの？

友達のように聞いてくれる。

友達のような口ぶりを聴きながら、四日前のセックスを思い出して喉元を見ていた。

うん。本気。恋人になりたかった。

理解に苦しむ、というのが心情だろうが、そこは理性で状況を整理して、アタマで私に追いつきながら、質問を続けてくれる。

カレシは？

カレシはカレシで、そのままだけど。別に嫌いにもなってないし。 大事だし、あいしてる。でも、その人が今どうしようもなく一番だから、彼氏とはこのまま付き合っていられない気がする。でも、ふられちゃったし。

は一。

どうやら本気でふられたみたいだけど、意外と冷静だね  
俺はこのままで、「俺は」ふられると思ってないだけど、合っている？

合ってル。

私は唯一の恋人を手に入れ損ねたので、アイジン氏ともそのままアイジンなんだろう。  
カレシとはどうなるかわからない。  
アイジン氏以外とのウワキは、なんとなくしないかもしれない。

ビガクでも引っかけにいこうかな。

ええ？

通称ビガクはアイジン氏の紹介で知り合ったビガク科の知人だ。  
こちらはアイジン氏と違って、我が学部の古きよき伝統、いわゆるブンガク青年。  
感受性が強すぎる。

私はビガクほど偏っているわけじゃないが、  
トラウマだかなんなのだから、自信がなさすぎて、自分勝手すぎて、ふらふらしていて、  
ブンガク青年とは、言葉少なで驚くほどコミュニケーションできてしまう。  
わかりあえる感覚が怖くて、あまり近づいていない。

ビガクはアクが強すぎるでしょ。合い過ぎて怖い、って言ってたんだし。  
俺にしときなさい。

「俺にしときなさい」は彼なりの励ましだった。

ビガクに手を出して自分を壊すな、まっとうな本気の恋なんて、失っても落ち込むな  
失恋したときくらい、気にかけてやろうと思うくらいの、思い入れはある

彼のソレラのメッセージ、彼の気持ちというものは、  
私たちの関係においては、確かに重く、ありがたいものだった。

トモダチも、コイビトも、アイも、否定するところから関係が続けてきた。  
お互い、そういうものが確かに存在して重要なものであり、かつ恩恵に預かっていることも  
知っていながら、でも肯定することはできず  
肯定の上で否定するという 共通のポリシーで成り立っている関係だった。

その間柄の中で、真実味のある感情を交わすことは、  
他の人間との感情のやりとりより重く、  
確かな誠意の現れだった。

だって退屈なんだもん。それに不安だし。こわいし。

心情を吐露するようなそれらしいことを言いながら、  
彼の気遣いに乗って甘えてみせたのは、今度は私なりの礼だった。

もっと連絡してきてもいいよ。  
さあご飯食べにいくぞ。

威勢のよい様子を演じながら、彼は私の背を押して歩き出した。  
こういうウソくさい演出を時々してくれるが、そこにわずかにだけ見える、  
彼の根っこのやさしさが好きだった。

ある春の日、私は失恋した。  
それから、うそがっぱいのアイジン氏と、すこしだけほんとの話をした。